どんな人が報徳仕法を行ったの？ 富田高慶・斎藤高行・荒　至重

中村藩で報徳仕法を実施する際、たくさんの人々が力を尽くしました。その中心となったのが富田高慶、斎藤高行、そして荒至重です。

木造富田高慶坐像
（南相馬市博物館所蔵）

富田高慶坐像と※佐藤朝山（佐藤玄々）

この像は現在の相馬市出身で全国的に著名な彫刻家佐藤朝山の作品です。

朝山は旧中村藩士で尊徳の弟子であった大槻吉直に依頼され作りました。大正10年（1921）、富田家に贈られました。

富田高慶

ここ見てね!! P19・40・41・42

高慶は「こうけい」もしくは「たかよし」と読み、久助ともいいました。

文化11年（1814）、中村藩士の子として生まれた富田高慶は、荒れはてた領内をたて直すため、江戸で勉強をしました。天保10年（1839）、二宮尊徳のもとに入門しました。高慶は弟子の中でも一番弟子となり、さらに尊徳の子文と結婚するなど、尊徳から絶大な信頼を得ました。また、尊徳の代理として藩の報徳仕法の実施を指導し、成功に導きました。尊徳の死後、高慶は尊徳の教えを世に広めるため『報徳記』や『報徳論』をあらわしました。

明治のはじめ、尊徳の妻子が戊辰戦争からのがれるため領内に移り住み、最後に南相馬市原町区石神（現在の石神生涯学習センターのところ）に住みました。その時も、二宮家の世話をするため隣に移り住み、明治23年（1890）、76歳で亡くなるまで二宮家及び報徳仕法に対し力を尽くしました。

富田高慶日記
（南相馬市博物館所蔵）

一口メモ

神社の祭神となった高慶

尊徳が亡くなった今市（現在の栃木県日光市）には尊徳をまつった報徳二宮神社があります。その祭神として、尊徳とともに高慶もまつられています。

斎藤高行

ここ見てね!! P57

文政2年（1819）～明治27年（1894）。

久米之助。富田高慶の甥（兄の子）にあたります。高慶と同じく二宮尊徳の弟子となり、高慶とともに藩の報徳仕法の指導にあたりました。また、『報徳外記』『二宮先生語録』をあらわしました。『報徳外記』は報徳仕法の理論・方法と指導者の心得、『二宮先生語録』は尊徳の言った言葉を書きつづり、報徳の教えをあらわしたものです。漢文の才能があった高行は、晩年の一時期、大原村（原町区大原明星入）に住んだことから、「大原山人」と名のり、漢詩などすばらしい作品をのこしています。

斎藤高行肖像画
（相馬市歴史資料収蔵館所蔵）

エピソード その6　高慶の入門のいきさつ

二宮尊徳のうわさを聞きつけた高慶は、桜町にいる尊徳のもとを訪ね、入門をお願いしました。しかし、尊徳は「あなたは儒学者なのだから学問のことは江戸の儒学者に相談したほうが良いでしょう。」と入門を断られました。しかし、高慶はあきらめずに近くの農家に泊めてもらいながら、尊徳のもとを毎日訪ねるということを4ヶ月続けました。このような高慶の熱意に心を打たれた尊徳は、ついに高慶の入門を許しました。

荒　至重

ここ見てね!! P28・29

荒至重肖像画写真
『荒至重先生小伝』より

至重は「むねしげ」もしくは「しじゅう」とも読み、専八ともいいました。文政9年（1826）、中村藩士の家に生れました。幼いときから頭が良く努力家で、藩での算術を1年足らずで修得、さらに江戸で修行し、3年間で算術・測量術などを修得しました。その後、尊徳に入門しました。藩にもどると仕法掛や代官として、修得した算術や測量術を用い、萱浜用水路など多くの用水路やため池をつくり、仕法の成功に導きました。また、これまで得た知識や技術を広め、人材を育成するために、『量地三略』や『算法町見術』をあらわし出版しました。

明治以降は、平町（いわき市）の町長などを務め、明治42年（1909）、83歳で亡くなりました。現在、鹿島区の南右田神社の祭神にまつられています。

※富田高慶や斎藤高行などについては、福島県教育委員会HPのうつくしま電子事典（人物編）でも紹介されています。

※佐藤朝山…本名は清蔵。佐藤玄々ともいう。明治21年（1888）～昭和38年（1963）。代表作に皇居の濠（東京都千代田区大手町）に建つ「和気清麻呂公像」、日本橋三越本店ホール「天女像」がある。

どんな人が報徳仕法を行ったの？

相馬益胤・相馬充胤・池田胤直・草野正辰

藩主の相馬益胤・充胤、家老の池田胤直・草野正辰は、報徳仕法の導入を積極的に推進しました。また、家老の池田や草野は尊徳にとってもよき理解者となり、いろいろと支援しました。そして、藩主をはじめ多くの人たちが積極的に取り組んだことにより、全国的にも数少ない成功したところとなりました。

相馬益胤　第11代藩主

ここ見てね!! P19

相馬益胤肖像
「歴代藩主肖像図」より
（相馬市　舘岡敏美氏所蔵）

寛政8年（1796）～弘化2年（1845）。文化10年（1813）17歳で藩主となり、天保6年（1835）まで23年間藩政にあたりました。天明3年（1783）天明のききんにより大打撃をうけた藩財政のたて直しのため、「文化の厳法」と呼ばれる倹約政策を実施するとともに、身分が低くても優秀なものであれば重要な役職にも任命し、後の藩の江戸家老草野正辰や国家老池田胤直らはこの時選ばれました。また籾を貯めるための蔵を造らせ凶作に備えるとともに、農家の次男、三男にも家を持たせ一人前の農民として扱い、農業人口の増加と荒れ地のたて直しを図りました。さらに武士の教育の振興に努め、人材の育成を図るため藩校「育英舘」を創設しました。

相馬充胤肖像
（南相馬市原町区　武岡京子氏所蔵）

相馬充胤　第12代藩主

文政2年(1819)～明治20年(1887)。天保6年(1835)、16歳で藩主となり、慶応元年（1865）まで31年間藩政にあたりました。藩主となった充胤は、最初に父益胤のあとを継いで藩財政のたて直しに取り組みました。このうち弘化2年（1845）より、報徳仕法を藩の事業として積極的に取り入れ, 藩のたて直しを成しとげました。また、充胤は北陸地方から浄土真宗門徒を移民として受け入れ、荒れ地となった田畑や人のいなくなった農村のたて直しに力を尽くしました。

報徳額　充胤書
（相馬市歴史資料収蔵館所蔵）

板に相馬充胤の書いた「報徳」という字が彫られた額で、仕法役所に掲げていたものです。

報徳仕法の導入にあたり、内政面を担当したのが国家老の池田胤直で、それに対し幕府への対応など外交面を担当したのが江戸家老の草野正辰です。

池田胤直

ここ見てね!! P19・56

胤直は、寛政３年（1791）に藩士の子として生れ、直常、八右衛門、そして図書を名のりました。池田家は代々家老職を務めた家柄で、胤直も文政２年（1819）28歳の若さで家老職に抜擢されました。主に領内の政治を担った胤直は、報徳仕法のことを知り、早速導入しようと家臣たちを集め、会議をおこないました。けれども多くの家臣たちからは、尊徳への疑心や仕法が失敗したときの不安などを理由に猛烈な反対がありました。しかし、どうしても導入したい胤直、そして草野正辰らの熱意がまもなく家臣たちに通じ、ついにはみんなが同意し、藩での実施にいたりました。その後も家老職をつとめた胤直は仕法開始から10年過ぎた安政２年（1855）に64歳で亡くなりました。

草野正辰

ここ見てね!! P19・48・49・56

正辰は、安永元年（1772）藩士の子として生れ、孫四郎、主計、後に半右衛門と改めます。草野家は代々軍者をつとめた家で、正辰もはじめ軍者をつとめます。しかし理由はわかりませんが藩主の怒りにふれ、処罰をうけました。8年間浪人生活を送る中で、大坂（大阪）や四国などの他藩の政治や生活の様子などを視察し、広い視野で物事を見ることができる人となりました。その後、文化10年（1813）藩にもどり、罪を許されました。

元来、優秀な正辰は、いろいろな役職を経て、家老、そして江戸家老となりました。その当時正辰にとっての急務は、藩財政のたて直しでした。そんななか、高慶より二宮尊徳のことを聞いた正辰は、さっそく江戸にいた尊徳に会いに行き、いっぺんに尊徳および仕法に心服しました。そして藩のたて直しにはこの報徳仕法しかないという思いから、すぐさま藩主をはじめ、他の重臣たちの説得にあたりました。反対の多かった藩内の同意、さらに尊徳の了解を得るなど、さまざまな難関を突破して仕法の導入に至ったのは、こうした正辰の信念と努力さらに尊徳も信頼した実直な人柄がなくてはならなかったと思われます。正辰は藩で仕法を開始した２年後の弘化４年（1847）75歳で亡くなりました。

※国家老…城下に住み、家臣の統率及び領内の政務を統括する役職
江戸家老…江戸に在住し対外的には藩を代表して幕府や他藩などとの交渉にあたった

どんな人が報徳仕法を行ったの？

慈隆・熊川胤隆・その他の主な尽力した人々

日光（栃木県日光市）の地で尊徳と親しかった僧侶慈隆は中村藩に招かれ、藩政治の顧問として仕法の指導にあたりました。また熊川は草野・池田の亡き後、家老職としてその任を全うしました。

このほか、身分の上下にかかわらず多くの家臣が藩のたて直しのために力を尽くしました。

慈隆肖像画
（南相馬市博物館所蔵）

慈隆

慈隆は、文化12年（1815）に江戸で生れましたが、すぐに医者であった父の仕事の関係で日光（栃木県日光市）に移り住んだそうです。慈隆は幼くして出家し僧侶となり、後に日光にあるお寺の住職となりました。それはちょうど、尊徳が幕府の命令により日光で報徳仕法を行っていたときで、尊徳だけでなく当時日光に出入りしていた中村藩士とも親交を深めました。そうしたさなか日光のほかの僧侶からねたまれ、慈隆は日光から追放されそうになりました。慈隆の才能を惜しんだ家老池田胤直は藩主相馬充胤に提言し、中村藩に招くこととなりました。安政３年（1856）中村（相馬市中村）に着いた慈隆はすぐに私塾を開いて藩士の子弟の教育にあたるとともに、藩政治の顧問として報徳仕法の指導や戊辰戦争の時の官軍との交渉役など大役をつとめました。明治５年（1872）57歳で亡くなりました。慈隆のお墓は相馬市西山の愛宕金蔵院跡、尊徳の墓のそばにあります。

熊川胤隆

文化11年（1814）、中村藩の重臣熊川家に生れましたが、初め同じ重臣の村田家を継ぎ、村田易隆（半左衛門）を名のります。藩で報徳仕法がはじまった翌々年の弘化４年（1847）数々の重職を経て家老となりました。その後、生家の熊川家にもどり、安政５年（1858）熊川胤隆（兵庫）と名を改めました。池田胤直亡き後、藩政全般にわたり指導をすすめ、報徳仕法についても引きつぎ積極的にすすめました。

慶応３年（1867）、大政奉還のとき、胤隆は病気をおして藩主のかわりに京都に向かいましたが、京都に着くとすぐに亡くなりました。

その他の主な尽力した人々

慶応元年（１８６５）の時に仕法関係役職の人たちの名前を記した資料があります。そこには、領内のほか日光での報徳仕法を行っていた者や藩の事業として北海道箱館近くの石川（北海道函館市）・軍川（北海道亀田郡七飯町）で開墾事業を行っていた者もあわせて書かれています。

御主法懸り（仕法掛）

飯塚孫右衛門・今野嘉太夫・佐々木五郎兵衛・池田源左衛門・藤崎源太左衛門・中野卯右衛門・増尾五郎左衛門・立野久左衛門・西内善右衛門・富沢孫左衛門・太田畯蔵・新妻助惣・川久保広衛・須江矢柄・木幡市之進・山田半左衛門・松岡清之進・門馬与五右衛門・鈴木恒右衛門・鈴木治太夫・大槻直蔵・木幡五右衛門・阿部清左衛門・木村庄次郎・小幡幸左衛門・羽根田重郎・川村儀助・四本松安・堀越周之助・水谷善次・池田倹太郎・羽根田由之助・氏家藤助・伊東卯三郎・竹村修助　　計３５名

御主法懸兼勤（仕法掛兼勤）

杉浦菊右衛門・大越八太夫・池田喜左衛門・志賀乾・佐藤利左衛門・志賀治右衛門・木幡文太夫・一条源太　　計８名

代官

和田久太夫・荒専八・大井三治・木幡藤右衛門・錦織寿助・愛沢精蔵・吉田作内　　計７名

郷方吟味役

牛渡卯太郎・遠藤良右衛門・清水左鷹・佐藤武右衛門・小林平右衛門・佐藤杢左衛門・水谷庄八郎　　計７名

郷方手代

浜名卯之助・半杭又左衛門・桑折市兵衛・鎌田周助・鈴木弥平次・遠藤文左衛門・菅野礼次郎・小野田庄之丞・佐藤巳代次・井戸川鉄弥・阿部仁右衛門・浜名要右衛門・太田卯佐次・吉田源之助　　計14名

諸郷御主法懸り（諸郷仕法掛）

半谷日向守・横山弥五右衛門　　計２名

北郷御主法懸り（北郷仕法掛）

相良喜右衛門　　計１名

日光今市詰

伊東発身・大槻古助・志賀三左衛門・大槻久蔵・山中四方八・新谷源次郎　　計６名

蝦夷地詰

佐々木長左衛門・大友新六・阿部俊助　　計３名

合計　83名

※出典資料：「御主法懸り」（相馬市歴史資料収蔵館所蔵）

※主法…報徳仕法のこと
※蝦夷地…現在の北海道